



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 名詞修飾における「トイウ」の機能(1)-統語的位置付け<br>-  |
| Author(s)    | 戸村, 佳代  |
| Citation     | 明治大学教養論集, 232: 443-452  |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/10291/12226">http://hdl.handle.net/10291/12226</a> |
| Rights       |   |
| Issue Date   | 1990-03-01  |
| Text version | publisher   |
| Type         | Departmental Bulletin Paper   |
| DOI          |   |

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 名詞修飾における「トイウ」の機能 (1)

—統語的位置付け—

戸村佳代

## 1. 問題の所在

日本語の名詞修飾構造は、(1)の例にも見られるように、修飾部が修飾される名詞に先行すること、文(節)による修飾の場合であっても関係代名詞に相当するような要素を必要としないこと、などが主な特徴であるとされている。

(〔 〕内は修飾語を、下線部は被修飾名詞を示す)

(1) a. [私が田中さんから聞いた] 話

b. [サンマを焼く] 男

ところが、修飾節と被修飾名詞が連続して出現せず、「トイウ」という要素が介在する場合がある。

(2) a. [田中さんが来月アメリカへ行く] という 話

b. [鞭で背中を打つ] という 罰

(1)の名詞修飾構造では被修飾名詞と修飾部の述語の間に格関係が認められ、(1)'に示す同一指示名詞削除によって生じたものとされるが、(2)にはそのような格関係が認められない。

(1)' a. [私が話を田中さんから聞いた] 話

⇒  $\phi$

b. [男がサンマを焼く] 男

⇒  $\phi$

寺村(1981)は(1)のタイプを「内の関係」の名詞修飾、(2)のタイプのを「外の関係」の名詞修飾と呼び、<sup>(1)</sup>「トイウ」はの外関係の名詞修飾構造にのみ現われる任意の要素であるとした上で、さらに被修飾名詞の意味特性を「トイ

ウ」の介在を決定付ける条件として取り上げている。

寺村は外の関係の名詞修飾においても「トイウ」と共起しないものとして挙げているのは、感覚の名詞<sup>(2)</sup>と相対性<sup>(3)</sup>の名詞<sup>(4)</sup>である。

(3) a. [サンマを焼く]  $\left\{ \begin{array}{l} \phi \\ * \text{という} \end{array} \right\}$  においがした。

b. [彼が寮から出る]  $\left\{ \begin{array}{l} \phi \\ * \text{という} \end{array} \right\}$  姿を目撃した人はいない。

(4) 食べ過ぎは [胃腸障害を起こす]  $\left\{ \begin{array}{l} \phi \\ * \text{という} \end{array} \right\}$  原因になる。

ところが、実際には感覚の名詞を被修飾語としながら「トイウ」を伴う次のような例がある。

(5) [誰かが金づちでブロック塀でもたたいている] という音が聞こえて、  
急いで外に出た。(読売新聞)

(6) [これはご飯でも焦げている] という匂いだ。(Terakura (1984, p. 24))

(7) この団地の場合……大幅な修理、更にはスクラップアンドビルドが余儀なくされている。そこには、歴史の断面を垣間見ることができる。[役割を果たした] という団地の姿に、よくやった、ご苦労さんと一言かけたい気持ちにかられた。(納賀雄嗣「住まいの本質を見なおせ」)

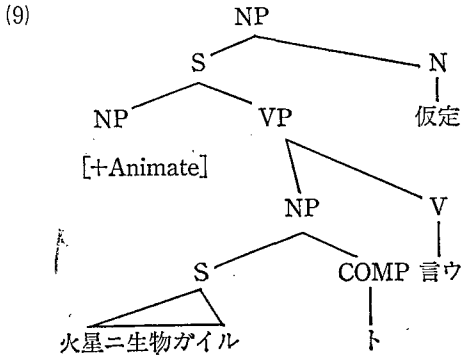
これらの例から分かるように、修飾される名詞の特性だけでは「トイウ」の有無を決定することはできない。

本研究の目的は、名詞修飾において「トイウ」が持つ機能を探ることによってそれが現われる条件を明らかにすることにあるが、分析を通して日本語の名詞修飾構造を全体的に見なおすことにもなると思われる。分析に際しては 1) 「トイウ」の統語的位置付けを明らかにすること、2) 「トイウ」の意味的機能を明らかにすること、という二点が当面の目標となる。意味論的分析については稿を改めて論ずることにし、本稿では「トイウ」の統語的位置付けに焦点を当ててみる。

## 2. 仮説 A

「トイウ」の統語的 位置付けとして、引用の助詞「ト」と動詞「言ウ」が結合したものであるとする見方がある。Song (1975) はこれを支持する立場を取り、(8)の名詞句は(9)の構造をもつと主張している。

(8) 火星に生物がいるという仮定



### 2.1. 反証一

(9)のような構造を仮定する第一の拠り所となっているのは、(10)~(11)で例示されるように、「ト」格を要求する発話・思考に関わる動詞が対応する名詞を持つ時、その名詞が文修飾を受ける場合には「トイウ」が義務的な要素になるということであろう。

(10) a. 彼女の方が悪い  $\left\{ \begin{array}{l} \text{という} \\ * \phi \end{array} \right\}$  主張

b. 彼女の方が悪いと主張した。

(11) a. 無事目的地に着いた  $\left\{ \begin{array}{l} \text{という} \\ * \phi \end{array} \right\}$  報告

b. 報告無事目的地に着いたと報告した。

さらに、修飾部にモダリティ要素が含まれる場合や省略がある場合に「トイウ」が義務的に現われるが、<sup>(5)</sup>これは引用の「ト」に先行する文に見られる性質と共通している。



## 2.2. 反証一2

動詞「言う」が名詞修飾に現われる「トイウ」の構成要素であるという主張に対する反論としてまず挙げられるのは(19)の二つの文に見られる対立である。

(19) a. 防衛費の枠を見直せという動きがある。

b. 防衛費の枠を見直せといった動きがある。

これは一見動詞の活用による違いであるかのように見えるが、もし「イウ」の部分が動詞としてのカテゴリーを与えられるのであれば、ル形とタ形の対立として、テンスまたはアスペクトの違いが生じるはずである。しかし、(19)にはそのような違いはまったくない。

## 2.3. 反証一3

Song は「トイウ」を「ト+言う」とみなす根拠として、次の例をあげている。

(20) ハワイでは、[[人々の [高見山が貴ノ花よりも強い] s<sub>i</sub> [と]]

[ ( a. いう ) ] Pred.] s<sub>i</sub> 意見がある。  
[ b. 見る  
c. 考える  
d. する  
e. とる ]

Song によれば、(20)では意味を変えることなく「見ル」「考エル」「スル」「トル」等の思考を表す動詞と置き換えることができ、これは「トイウ」が「ト」と動詞「言う」によって構成されていることを示すという。しかし、これが(20)の文の正しい理解とはいえないことは(21)から明らかである。

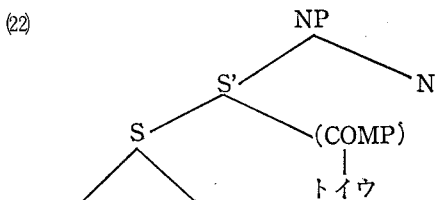
(21) ハワイでは[人々が高見山が貴ノ花よりも強いと ( いう/いつている ) ]  
[ 見る/見ている  
考える/考えている  
する/している  
とる/とっている ]

という事実がある。

(21)では(20)と同等の構造をもった名詞修飾に対して「トイウ」が挿入されており、また修飾部には「テイル」というアスペクト要素が付加されうることも示されている。すなわち、Songが「見ル」「考エル」等の動詞と平行的に用いられるものとして提示した「言ウ」は修飾部と被修飾名詞の間に現われる。「トイウ」とは別物なのである。

### 3. 仮説 B

仮説 Bは「トイウ」を分けることのできない一つの要素である補文標識として位置づけるものである。したがって、外の関係の名詞修飾は次のような構造として表される。



Nakau (1973) は日本語の文補文を包括的に論じたもので、「トイウ」を補文標識として位置付けているが、その論拠は次の三点に要約することができる。

- (23) a. 「トイウ N」と「トイッタ N」はテンスの対立をもたない。  
 b. 「トイウ」の「イウ」は明示的にも含意的にも、動詞としてとるべき主語の NP をもたない。  
 c. 「イウ」にはモダリティを表す助動詞、アスペクト要素、否定の「ナイ」を付加することができない。

また、S' 節点を設定する根拠として、次の二点が挙げられている。

- (24) a. NP の領域内で、補文 S を前置する時、「トイウ」も前置される。  
 b. 補文が代用形に置き換えられるとき、「トイウ」もそれに組み込まれる。

(24 a, b) はそれぞれ(25) (26)によって例示される。(25)において、下線部は前置された部分を示している。

- (25) a. [太郎の [幽霊が出た] という言葉] にみんな驚いた。

b. [[幽霊が出た] という] 太郎の言葉にみんな驚いた。

c. \* [[幽霊が出た] 太郎のという言葉] にみんな驚いた。

(26) A: [アメリカで大きな地震があった] というニュースを聞きましたか。

B: いいえ、私は

|   |                              |   |            |
|---|------------------------------|---|------------|
| { | a. そのニュース                    | } | は聞きませんでした。 |
|   | b. * そのというニュース               |   |            |
|   | c. *                    ニュース |   |            |

#### 4. 「補文標識」説の妥当性

「トイウ」を補文標識とみることによって説明が可能となる現象がいくつかある。

まず第一に仮説Aでは問題とせざるをえなかった「イウ」のテンスの対立を考慮する必要がなくなり、(27)の a～e を単に補文標識のバリエーションであるとして処理することができる。

(27) 現代の人はちょっとした事柄を書くのにも多量の漢字を濫用しすぎる

|   |          |   |        |
|---|----------|---|--------|
| { | a. という   | } | 指摘がある。 |
|   | b. といった  |   |        |
|   | c. とかいう  |   |        |
|   | d. とかいった |   |        |
|   | e. との    |   |        |

第二に、「イウ」が動詞だとすれば当然考えられなければならない「主語」の存在が問題とならなくなる。逆に言えば、「主語」が想定できる文は、もはや修飾部と被修飾語の間に介在する「トイウ」ではない、と結論できるのである。(28)の非文法性は「イウ」に対する主語の存在に起因する。

(28) \* 現代の人はちょっとした事柄を書くのにも多量の漢字を濫用しすぎると私が/彼が/現代の人が/誰かが いう主張がある。

(29 a)の「トイウ」は補文標識としてではなく、動詞として機能している。したがって、(30 b)が非文法的であるのに対して、(30 a)では補文標識を挿入した文が可能である。





なぜなら、(33)は(35)に例示されているような動詞が省略されてできた文であると考えることができるからである。

- (35) a. 国の母から大きな火事があったと  $\left. \begin{array}{l} \text{知らせる} \\ \text{書いた} \\ \text{伝える} \end{array} \right\}$  手紙があった。
- b. 友達から試験に合格したと  $\left. \begin{array}{l} \text{知らせる} \\ \text{報告する} \end{array} \right\}$  電話があった。

## 5. まとめ

以上、本稿では「トイウ」の統語的な位置付けに関して可能な二つの分析を検討し、「トイウ」が補文標識として扱うべき機能語であることを見た。しかし、このことは「トイウ」が意味的な役割を果たしていないということの意味するものではない。「トイウ」があるかないかという形の違いは必ず文の意味解釈に反映しているはずであり、その意味的機能が明らかにされてこそ名詞修飾構造の中に「トイウ」が現われる条件を示すことができるのである。この意味的機能については「名詞修飾における‘トイウ’の機能(2)」で議論することにする。

### 注

1. 「内の関係」の名詞修飾は「関係節」あるいは「同一名詞連体修飾」と、また「外の関係」の名詞修飾は「付加名詞連体修飾」と呼ばれることもある。
2. 寺村が感覚を表す名詞として次の名詞を挙げている。  
「音、姿、匂い、気、気持ち、気配、様子」等
3. 相対性名詞には、(i) 基準点を表すもの、(ii) 「対」概念をもつもの、(iii) 対概念はないが「因一果」の関係が考えられるもの、の三種類があり、それぞれ次のような例が挙げられている。  
(i) 「上、下、前、後、間、途中」等  
(ii) 「結果、原因、理由、罰、罪」等  
(iii) 「痕、残り、悲しみ、あたり」等  
相対性名詞を被修飾語とした名詞修飾は、寺村(1981)で「逆補充の連体修飾」と名付けられている。
4. 同様の指摘は奥津(1974)等にもある。

5. 話者の心的態度を表すものでも、「～タイ」の場合には「トイウ」を用いない例がある。

i) [留学したい] 気持ちをどうしても押さえることができなかった。  
しかし、「～タイ」については仁田(1989)の議論に見られるように真正のモダリティ形式とは言えないとする見方もあることを考えるならば、修飾部にモダリティ要素がある場合には「トイウ」が要求されるという条件は保持されるというよいと思われる。

#### 参考文献

- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上)』大修館書店  
奥津敬一郎 (1974) 『生成日本語文法論——名詞句の構造——』大修館書店  
寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法(下)』国立国語研究所  
—— (1982, 84) 『日本語のシンタクスと意味 I, II』くろしお出版  
仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』  
くろしお出版  
Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Kaitakusha.  
Maynard, Senko (1984) "Function of *to* and *koto-o* in speech and thought representation in Japanese written discourse", *Lingua* 64, pp. 1-24.  
Song, Zeno (1975) "The function of *to yuu* in Japanese". *University of Hawaii Working Papers in Linguistics*, 7:2, pp. 17-34.  
Terakura, Hideko (1984) "Noun modification and the use of *to yuu*", *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 18: 1, pp. 23-55.